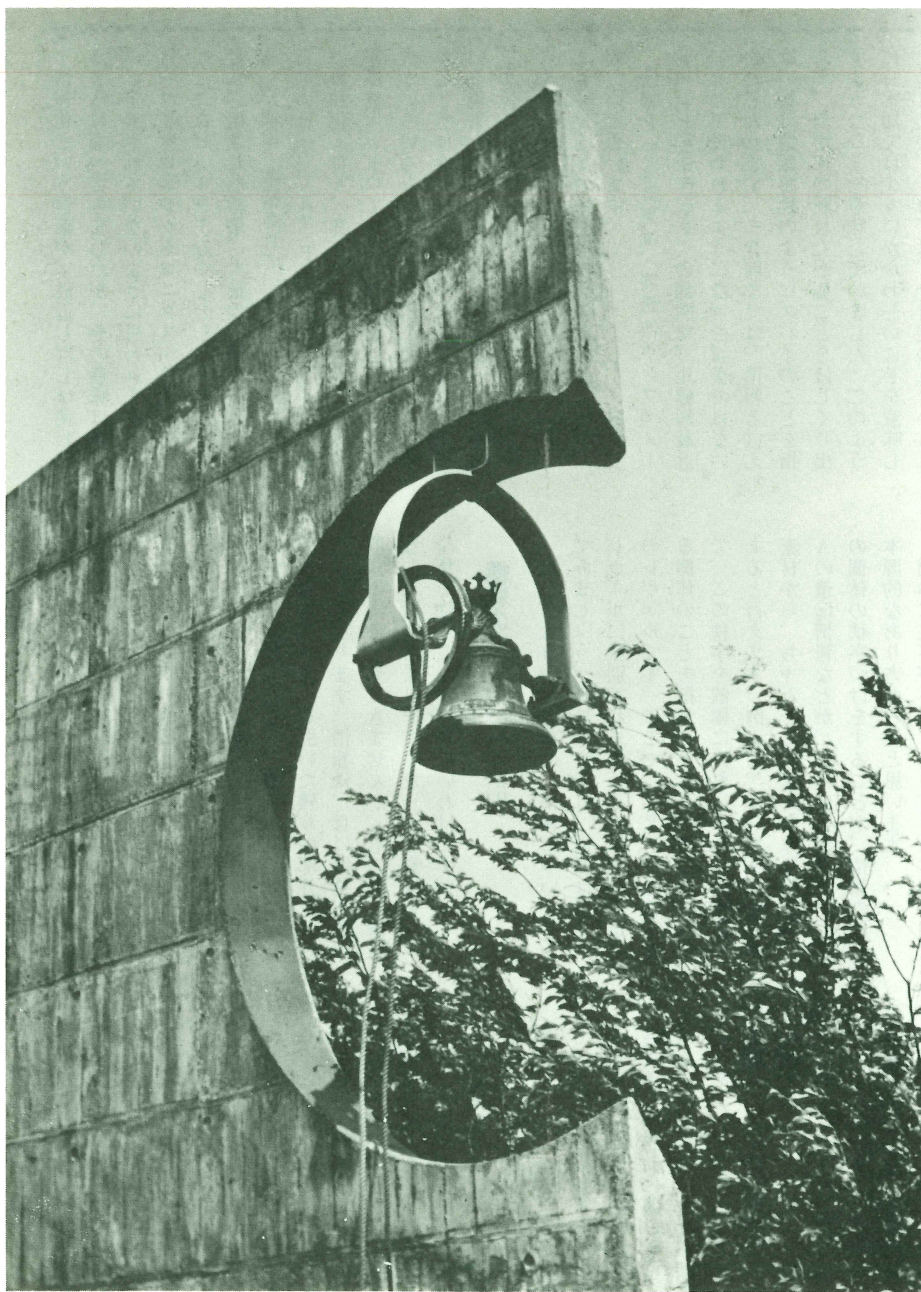


# SEMINAR HOUSE NEWS

## セミナー・ハウス'86冬



◇開館20周年記念◇

|| 第133回大学共同セミナー ||

●情報化と社会

|| 20周年記念会 ||

●新旧の友垣の中でハウスの“成人”を祝う



Plain living and high thinking

No.101

# 情報化と社会

——情報の本質の意味を探る——

東京大学経済学部教授 竹内 啓

情報化という言葉が、最近しばしば使われるようになってきましたが、その意味は厳密には定義されていないように思われます。最近、マイクロエレクトロニクスが急速に発達し、コンピューターを中心としているような分野に応用された結果、大量の情報が社会に流通し、使用、蓄積されています。具体的には、工場のロボット化（FA）、オフィスや家庭の自動化（OA、HA）の進展、INS（情報通信ネットワーク）の普及など、情報の処理がいろいろな電子的な機器を使って、行われるようになっていきます。一般的には、そういう現象を指して、「情報化」と言っているのではないかと思います。私はここでは少し角度を変えて、そもそも情報とは何かということから話を始め、情報を根本的に捉え直してみたいと思います。

情報という言葉は、英語のインフォメーション（information）の翻訳で、比較的最近になって使われるようになった言葉ではないかと思われます。一昔前までは、情報と言えば、軍の情報将校のようにスパイのことを指して、何か人の隠したがることをほじくり出すようなことを意味していました。このように日本語では少々いかがわしいことを意味したのですが、それでは、今日使われているような意味での情報とは一体何かと考えると、その定義はなかなか難しい。私は常々、ものはすべて素材とエネルギーと情報から成っていると考えています。例えば、人間は言うまでもなく、さまざまな物質・素材からできています。もちろん、それだけでは活動できないので、エネルギーが必要です。では、素材

②

にエネルギーをかけたなら人間ができるかと言えば、そうはいきません。ちゃんととも人間にするためには、何かそれ以外のプラスαが要るわけです。私は、このプラスαの部分が情報ではないかと考えています。したがって、式で表わせば、「もの+素材+エネルギー+情報」となり、情報とは、ものから素材とエネルギーを引いた残りの部分だということになります。情報は、目には見えず、取り出すこともできませんが、ものは、情報なしにはまとまりを持った一つの意味をなす全体を作ることができないわけです。

## 情報の三つのレベル

次に、もう少し具体的に情報について考えてみましょう。私の考えでは、情報は三つのレベルに区別されます。その第一が「もの」のレベルです。ここで、「もの」とは秩序ある個体のことを指すとすると、何らかの意味で、この秩序を個体に持ち込むものが情報であると言えます。例えば、タンパク質などの素材から、ちゃんとした人間を作り出すDNAの遺伝情報などが、これに当たります。この個体の秩序づけをすることが、情報の最も本源的なあり方だろうと思います。

個体に秩序があるということは、別の観点から見ると、それが、いくつかの部分から構成されているシステムであることを意味しています。例えば、一人の人間は目、手、心臓、胃などそれぞれが一つの秩序を持つ個体が、たくさん寄せ集まってできています。各々の部分は、違った働きをしているわけですが、それらの間に何らかの意味で統合や調整が行

われて初めて、人間は活動することができます。目で見て、食べ物があるとわかったら、手を伸ばして、口に入れ、胃で消化する。これは、異なる部分が互いに関連した目的に対して、整合的に機能するから可能になるわけです。ここで個々のシステム間の機能の調整や統合を可能にしているのがやはり情報であり、人間では脳と神経器官を通じて、この情報を処理、統括しています。このように、情報の第二のレベルは、システムの中における情報と考えることができるでしょう。

第三の情報のレベルは、独立して活動している異なったシステム相互間の調整の問題です。それぞれが皆一個のシステムである人間は、お互いの働きの間の交渉や調整を通じて、相互に意味のある反応を合っています。ですから、私がここで何かをしゃべれば、皆さんが一所懸命に聞いて、ノートをとったり、あるいは、つまらなければ居眠りをしたりする。そういう異なるシステム相互間の機能を調整しているのも情報だろうと、私は考えています。

このように、互いに何かの意味で交渉し合っているとすると、そこには情報の媒体と通路が必要となります。私の声が皆さんに届き、皆さんが日本語を知っているから、私の話していることが理解できるわけです。このことから、情報が相互の調整を可能にするような媒体を作る前に、両者が共通の情報基盤をお互いに持っているなければならないことがわかります。

## 生物界と情報



以上のようにみえますと、情報は別に人間に限られた現象ではないことが明らかになってきます。例えば、昔から、生物とはそれを構成する物質の単なる物理和以上の神秘的なものであり、そこには生氣とかアニマとか呼ばれるものがあるのではないかと言われてきましたが、私に言わせれば、生物が単なるタンパク質の集合でないのは、それが情報を持っているからなのです。生物を生物たらしめているのは、まさに情報だと言ってよいわけで、特に生氣というような何か神秘的な実体があると考えする必要はないでしょう。

ところで、生物は個体だけで生きることができないことは言うまでもありません。例えば、動物の雄と雌をばらばらに切り離しておけば、種は絶対に存続しない。個体と個体が何らかの意味で相互に協力し合って、初めて種は存続してゆくのであり、その協力や調整は、やはりそこに情報があるから可能になるわけです。機械は何台並べてもただの機械にすぎませんが、動物は、情報によって個体の単なる代数和ではない種社会を作り上げているのです。

人間に関しては、生理的なレヴェルでは、動物と余り変わりませんが、心理的存在としてもう一つの側面を持っている点に特徴があります。その場合、心理そのものが一種の情報過程だと言うことができますが、それが全体としてうまく統合されていくためには、心理の中にいくつかの情報レヴェルがなければなりません。例えば、大声で怒鳴っていれば怒っている、涙を流していれば悲しいとかいろいろの具体的な過程の背後に、全体を統合す

るメタ情報過程があるはずで、それが人格を形成しているのだと考えられます。この人格というメタレヴェルでの統合がうまくゆかないと、ノイローゼや精神分裂病などになってしまうわけです。

### 情報システムの発展のために

次に、情報論的観点から社会そのものについて考えてみましょう。企業や官庁のような何らかの一定の意図を持って、意識的に作り上げられた社会組織は決してばらばらな個人の和ではなく、情報機構そのものだと言っていいと思います。例えば、官僚制の最大の特徴は、権限と任務が分業できちんと決まっていることで、情報の流れ方とそれに関する決定が明確にルール化している点で、それは一種の情報機械 (information machine) とも言えるでしょう。

このような意識的に作られた社会組織に対して、社会と呼ばれるもつと漠然とした場も、さまざまな情報の側面を持っています。人々が協力し合って、生産を行い、生命や生活を維持してゆく経済過程では、その中で多くの情報交換が必要とされています。そこでは、ものの価値に関する情報が、貨幣という媒体と市場という場を通して、流されています。経済過程と同様に政治過程もまた一種の情報過程で、政治のプロセスは、何らかの意味で人々の間に合意を作り出す過程だとすれば、そこでは意志を伝達することが重要な意味を持つているわけです。

以上のような考察を通して、最後に情報を社会システムのレヴェルとの関わりからまと

めてみると、情報によるシステム間の調整・統合 (coordination and integration) 機能が非常に重要なことがわかります。第一に、それが十分に働かなくなったり、破壊されたりすると社会システムそのものがうまくいかなくなってしまう。例えば、経済における情報媒体である貨幣の価値が、インフレによって大きく変動すれば、貨幣の情報機能が働かなくなり、経済がうまく活動しなくなってしまう。第二の点は、情報が逆に社会システムに一種の解体や分割化 (segmentation) をもたらすことです。すなわち、ある部分で非常に強く情報の統合が成り立ってしまうと、他の部分との間で、逆に調整がうまくいけなくなることがあるのです。また、余りにも安定しすぎると、柔軟性がなくなると、環境の変化に適応できなくなってしまうことも起こります。情報システムの発展のためには、安定性と柔軟性のバランスをとることが必要で、情報統合には、少し遊びやゆらぎがあった方がよいわけです。このことは、これから、情報化が進展して、情報システムに機械が導入されると、それに伴って情報の固定化の危険性が非常に大きくなることを示唆しています。機械同士では、ちよつと違ったシステムでも理解し合うことは、全く不可能なのです。

情報革命と言われるような情報技術の急激な進展の中で、個々の現象に捉われることなく、情報の本質的な役割にまで遡って考えることが、そのプラス面とマイナス面を正しく理解していく上で、必要であろうと思います。

# 新旧の友垣の中でハウスの“成人”を祝う

85年10月26日(土)

この日、雑木林の紅葉はひとときわ光彩を放ち、丘の上を若人のうたう讃歌と典雅で力強い楽の音が清澄に流れていた。当ハウスの開館20周年を祝う記念会が、来賓一三〇名をお迎えし、第133回大学共同セミナー講師・参加者六〇名、関

係者を加えて総勢二〇〇名の相集う中でとり行われた。プログラムは下記のように三部から構成され、有形無形の友情出演に支えられて進行的な。この丘に連なる人々によって繰り広げられたパフォーマンスは余韻を残してその幕を閉じた。

## 二 挨拶―式辞―

理事長・館長 中川 秀恭

本日、文部省、学界、財界、八王子市、千人会からのご来賓をお迎えし、また第133回大学共同セミナー参加学生諸君、その指導に当たられる教授の方々のご参列の下に、大学セミナー・ハウス開館20周年を祝う式典を執り行うことができました。まことに喜ばしく慶賀の至りでありませう。

顧みますと、飯田宗一郎氏の提唱により、茅誠司東大総長、大浜信泉早大総長、上代たの日本女子大学長、その他学界の指導者の方々のご賛同の下に、三井銀行会長佐藤喜一郎氏をはじめとする財界のご援助によりまして、この地に大学セミナー・ハウスが開館されましたのは昭和40年7月5日のことでありました。爾来、

今日まで20年、その間新しい施設が年を追うて設けられ、キャンパスの自然も整い、今日の偉容を見るに至りました。現在のところ収容人員約二七〇名、年間の利用者五万数千名、開館以来延八五万人に近い学生諸君がこの丘で寝食を共にしながら研修されました。この時に当り、

ハウス創立のためにご尽瘁なさいました方々を覚えて、ここに心からなる感謝を捧げるとともに、今日に至るまでに賜わりました文部省のご指導、財界のご支援、協会員校ならびに千人会各位のご援助とご理解に対して、深甚なる謝意を表します。また当ハウスの企画になる各種の共同セミナーは、協会員校である諸大学の有力教授の方々のご指導によって行われてきておりますが、これらの方々に対しましてもここに厚くお礼を申し上げます。

“大学を開く”という理念を掲げてこのハウスが開館されましたのは、わが国

## プログラム

受付開始 (12時30分)

◆第一部 特別記念シンポジウム (13時～15時15分)

「情報化と社会」

△司会▽ 東京大学教授 竹内 啓

△発題者▽ 東京大学教授 木村武二

慶応義塾大学教授 鈴木孝夫

同志社大学教授 榎原胖夫

◆第二部 記念式典 (15時15分～17時15分)

△司会▽ 聖心女子大学教授 岡 宏子

奏楽 東京薬科大学1年 新井いずみ

パッパ作曲 カンタータ第一四七番

挨拶・式辞 理事長 中川秀恭

合唱 大学セミナー・ハウス讃歌

祝 辞 東京薬科大学合唱団

文部大臣 松永 光

(文部省大臣官房審議官・横瀬庄次氏代読)

八王子市長 波多野重雄

成蹊大学学長 朝倉孝吉

中央大学学長 川添利幸

早稲田大学常任理事 清水 望

東京外国語大学教授・前国際プログラム委員会委員長 中嶋嶺雄  
明星大学教授・日本ワールド協会会長 井村君江  
青山学院短期大学助教・第11回大学共同セミナーOB 柳父園近  
野村総合研究所研究員・第3回大学共同セミナーOB 金森 剛  
琴・尺八五重奏 現代邦楽サークル  
飛騨に寄せる三つのバラード  
創立者への感謝  
初代館長 茅 誠司  
名誉館長 飯田宗一郎

(お二人がご欠席のため、司会者が茅氏の祝電を披露し、飯田氏のメッセージを代読)

永年勤続者の表彰

企画室長 飯田能子  
庶務主任 坂本光子  
理事長 中川秀恭

奏楽 ベートーヴェン作曲 ポロネーズ  
新井いずみ

◆第三部 記念パーティー (17時30分～18時30分)

乾杯 評議員・前法政大学学長 中村 哲

の大学において、いわゆる紛争がようやく始まろうとする頃でありました。その後、紛争の激化に伴い、大学のキャンパスで講義などを行うことが困難になるに及んで、ハウスの利用が盛んになってまいりました。やがて紛争は沈静化しましたが、このハウスの存在意義は広く認識

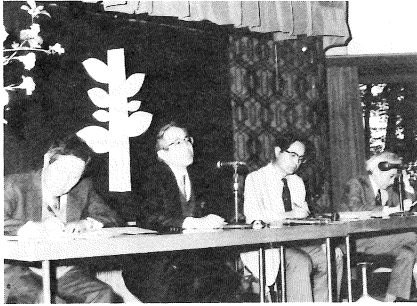
せられ、この丘の美しい自然環境の下、簡素な生活を共にしながら、あくまでも高邁な思索をするという経験は、各種セミナーに参加された学生諸君に消えることのない印象を与えているように思われます。一方、キャンパスの諸施設は20年の歳



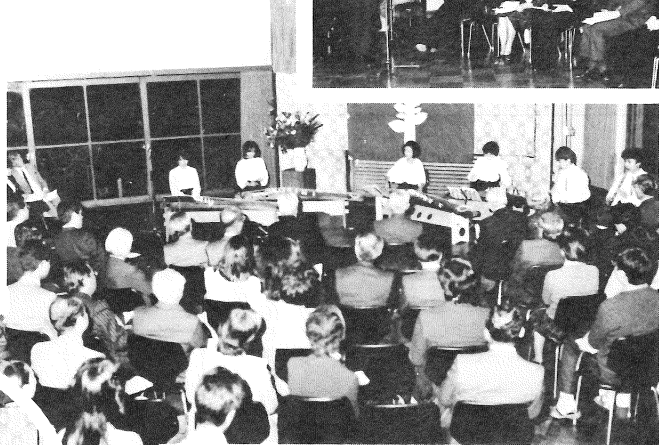
記念式典——東京薬科大学合唱団によるセミナー・ハウス讃歌が流れる



(左)式辞をのべる中川理事長  
(右)協力会員校代表として祝辞をのべる朝倉成蹊大学長

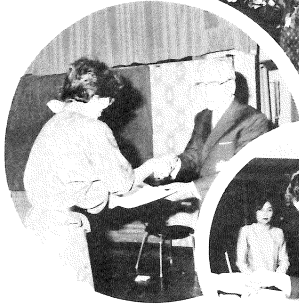
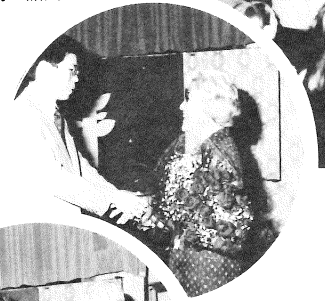


特別記念シンポジウム：左より榑原、木村、鈴木、竹内の諸氏



琴・尺八五重奏を楽しむ来賓

職員から感謝の花束を贈られる司会者・岡聖心女子大教授——共同セミナー委員長としての10年間に亘るご奉仕に対して



永年勤続の表彰を受ける職員たち——飯田企画室長(上)と坂本庶務主任(下)



記念パーティーで再会の面々(食堂)



受付で記帳する宮崎東京薬科大学長(左端)



月を経て老朽化しつつあり、営繕等にも少なからぬ経費を要しますが、現在のところはさしたる支障もなく事業を続けておる次第であります。なお、このたび開館20周年を記念いたしまして、海外、とくに中国、東南アジア諸国、韓国等から留学生と日本の学生のために共同セミナー等を開催し、学問を通じて相互の理解と親睦を図り、将来の国際関係の推進を図るための一助とするために、いわゆる「インターナショナル・ロッヂ」の建築を計画いたし、募金を始めようとしております。このことにつきまして各位の格段のご支援助とご理解を賜わりたく、この席をかりましてお願いする次第であります。

主なる来賓 (敬称略)

朝倉孝吉、荒川孝子、相賀昇、石館守三、井早康正、井村君江、J・ローラー、石田孝夫、岩下亥久夫、石川洋二、伊藤新一、飯尾右一、宇野重昭、岡山猛、尾関みゆき、大竹十一、尾山栄吉、大竹美登利、川島重成、川原栄峰、川添利幸、釜范善一、金森剛、川久保九一、笠井伍朗、河内幾久江、刈田草一、河田喬夫、金野功、北沢高純、慶谷伸代、小池龍太郎、小林靖之、小和田恒、佐藤音彦、坂本一雄、酒井嘉一郎、齊藤一郎、佐藤進、坂本さく枝、清水望、清水護、柴垣和三雄、下生仁美、柴田勇造、鈴木皇、鈴木和子、関口実、十代田知三、高峯一愚、高橋源次、高橋健人、高石道明、田所光子、千野熊男、王田美芳、辻清、手島修蔵、常盤豊、中村真、中村哲、中島義博、中嶋嶺雄、中尾光次、中村洋子、早崎勝弘、林部二、早川茂次、波多野重雄、広野良吉、藤永鉄雄、福田延衛、星野欣也、本間正人、松崎義徳、前川登、宮崎利夫、三戸厚子、溝口栄、山下幸夫、山代昌希、山口秀隆、柳友園近、芳野越夫、横瀬庄次、吉田美穂子、吉永フミ、若槻哲雄、和田実、鷲尾弘美、森川絢一

## 祝辞から



東京外国語大学教授  
中鳴嶺雄

20周年というのは、ちょうど戦後の半分、日本が最も目覚ましく発展し国際化を迎えてきた二〇年を、大学セミナー・ハウスはともに歩んできたわけです。しかしながら国際交流も単に一時的な情報の伝達の時代ではなく、上部だけの交流ですまなくなっています。

私はこの夏、少し憂鬱な気分になっておりました。アメリカ有数のジャーナリスト、セオドア・ホワイトが、最近の日米貿易摩擦から大変厳しい日本批判をした。ミズリー号上で降伏文書に調印したとき、重光外務大臣が片足を引きずって船上つてきたのを見ても、何らの同情もなかった、憎しみの気持でいっぱいだった。今、また、日本に対してそういう気持を持っている、と彼は言うわけです。彼はもととハーヴァード出の中国通のジャーナリストで、私は専門柄、彼についてはよく知っています。これほど日米関係が理解し合えると思っっているアメリカの中からの批判です。

そして9月のはじめに私はモスクワにおりました。9月3日の夜、火花が上つてとても華やいだ雰囲気です。それはミ

## ● 文部大臣メッセージ ●

大学セミナー・ハウスが昭和40年に当地、多摩丘陵において開館して以来、静かな自然環境の中で教授と学生とのグループが起居を共にし、思索、討議し、人格的接触を図りながら人間形成を行うことを目的としてその運営を行い、現在の姿にまで発展をみえたことはまことに喜ばしいことと存じます。これもひとえに歴代理事長、館長、役員はじめ関係の皆さま方のたゆみないご努力の賜であり、深く敬意を表する次第であります。

近年、我が国の高等教育は著しい発展普及を遂げておりますが、その一方で大学の規模の拡大により、学生の人格形成に欠かせない教師と学生との親しい接触の機会が少なくなりがちであり、また豊

ズリー号の戦勝40周年のお祝いの火花でした。その夜、在モスクワ中国大使館では、クレムリンのアリエフ政治局員が中国の人たちと一緒に祝っていた。いつてみれば戦後の日本の大きな発展が一廻りして、少なくとも8月から9月にかけてはアメリカもソ連も中国も、日本に対して非常に厳しい姿勢で一斉に同一線上に立ったのです。

このことは、我々は国際化とか国際交流というけれども、アメリカの要求に応じて日本の防衛力を増強すれば、今度おそらく中国もソ連も批判するでしょうし、あちらを立てればこちらが立たず、非常にむずかしい時代になってきたことを示しています。

かな物質社会の中で、ややもすれば学生生活も厳しさを欠きがちであります。このような状況の中で大学セミナー・ハウスが「簡素な生活、高潔な思想」の信条の下に、教師と学生との人間的な触れ合いによる相互啓発と研修に協力されていることは、我が国の大学教育の充実にとって誠に意義深いものがあります。

また、大学セミナー・ハウスは「開かれた大学」という理念の下に、国公私立の大学がその枠を超えて相互に交流することが出来る場を提供するとともに、学生に国際交流の場を提供するという観点から、内外の学生、教師が一堂に会する国際学生セミナーの開催等の事業を行っております。現在、我が国の大学に関し

わがセミナー・ハウスは、これまでの二〇年間、本当に素晴らしかったと思いますが、これから21世紀に向けてどう発展していくべきかを考えていかなければいけないと思います。そのためには、理事長がいわれたインタナショナル・ロッジの建設も、本当の国際交流を行うよい場所であります。もう一つは、今日、ここで皆さんが参加している共同セミナーは、大学の単調な授業に数倍も優る深い内容を持っているわけで、このセミナーがそのまま大学の単位として認定されるように、教育改革の一環をも担っていただくたい、というお願いを申し上げます。ご挨拶を終えたいと思います。

(前国際プログラム委員会委員長)

て、開かれた高等教育機関となること、あるいは一層の国際化を図ることなどが重要な課題として課せられていることに鑑みますと、大学セミナー・ハウスの果すべき役割は今後ますます重要なものになるものと考えます。関係各位におかれましては創立の理念にのっとり、全国の大学関係者の期待に応えるべく、常にその真価を発揮されるよう、一層のご努力をお願いしたいと存じます。

ここに大学セミナー・ハウスが開館20周年を迎えられたことに対し心からお喜び申し上げますとともに、今後の一層の発展を祈念いたしましてお祝いのことばといたします。

昭和60年10月26日 文部大臣 松永 光



野村総合研究所員  
金森 剛

私が最初にこちらへまいりましたのは昭和57年、社会学合同セミナーの準備委員としてでした。このセミナーは、第1回、第2回とも、先生方と企画室の企画で運営されていましたが、3回目に至り学生が自分たちで運営して新しい内容を創造しようという話が出てきたのです。

私は第3回セミナーで次の二つのことを経験しました。一つはクールな経験です。委員の立場で宿泊の手配やら会議の司会役、一〇〇名に及ぶ学生のまとめ役

# 開館20周年記念会

## 開館20周年式典に寄せて

名誉館長

飯田宗一郎

大学セミナー・ハウスが開館して二〇年、私には幸福だったこと、残念だったことが、(こ)も(こ)も思い出されるのですが、今日、この式典に(こ)むを得ず欠席し、お集りの方々に対し大変失礼を申し上げますことを、まずお詫びいたします。

私が今、ここで申し上げたいことは、数多くの方々とめぐりあいたいについては、大袈裟な言い方をさせて頂ければ、セミナー・ハウスがなかったら、今日、ここにおられる方々も、お互いにめぐりあう機会はなかったかも知れません。セミナー・ハウスに行けば誰かに会える。その楽しみの場をつくらうと、私は一所懸命でした。私の熱にひかされ、貴重な時間を犠牲にしてご奉仕下さった方々に、私はいつも感謝申し上げております。目を閉じて思う時、めぐりあいがめぐりあいを呼ぶこの丘の大きな柱になって下さった恩人ともいふべき先生方のお顔がかがびます。物理学者・山内恭彦先生はご専門の物理学以外に、哲学、文学、仏教、経済学、法学など多方面の学者達との交流の機会をつくって下さいました。そのあと、専門分野をこえて、どれほど沢山の学者達や学生達がこの丘でめぐりあったことでしょう。

数年前のある日、早稲田大学の峰島旭雄教授から電話をいただきました。岩波

の英和辞典に「inter-university」が載っていますよ、というお知らせでした。この大学セミナー・ハウスは、性格的には「Inter-University Seminar House」でありたいという思いから、こんな日本人の英語で呼びつけたのが公認された、というわけです。(八)セミナー・ハウス(八)というのも、私がそう呼びたいとご相談した英文学者の斎藤勇先生にご賛同いただいたものです。「セミナー・ハウス・ニュース」を創刊する時、その標題は「ざり簡単に「セミナー・ハウス」でよいと主張されたのは、ドイツ文学者・手塚富雄先生でした。

「こ(こ)は」といえば、ハウスの標語としてワーズワスの詩から「Plain living and high thinking」を選び、「簡素な生活と高潔な思想」と訳した時、政治学者・丸山真男先生が、それでは平凡で弱いから動詞にした方がよいといわれ、「生活は簡素に、思想は高潔に」となりました。数えていけばきりがありません。

さて星移り、年変わり、二〇年の歴史が経過しました。私が東京大学総長・茅誠司、早稲田大学総長・大浜信泉、慶応大学塾長代理・佐原六郎の三先生をご案内してこの多摩の丘に来たのは、昭和三七年(一九六二年)の一月二十日、冬の寒い日、スキの丘でした。僅かに残っている雑木林はすっかり落葉し、松と杉の緑が点々としていました。ヤブの中を案内してくれた村人が、(まじ)が(まじ)いるところですよといわれたのでびっくりしたもので

した。今は数多くの記念樹が大きく成長し、春は緑、秋は紅葉の美しい丘になりました。建築学界に新風を吹きこんだU研究室と、早大教授・吉阪隆正教授の設計になる建物群がすっかり丘の風景になりました。人が集まり、木を植えつづけた二〇年が、当初においては想像もつかない程に、学問を好み、学生を愛する学者達と学生達によって、立派なキャンパスになったことは感無量です。

大学セミナー・ハウスは、大小すべての企画が学問に裏打ちされ、高い思想に支えられつつ成長しましたが、その土台にはすばらしい人間の善意、美しい人間関係があります。故日本女子大学長・上代たの先生と財界の元老、故三井銀行会長・佐藤喜一郎氏の人格と識見は、正に隅の首石でした。このお二人が、私の天国に来る日を待つておられると思います。が、そんなに早く来るところではないよ、とおっしゃっておられるようでもありません。

今も新しく、なつかしいお顔が幾百、幾千と私の目の前に現われます。松下館(教師館)のために三、〇〇〇万円を松下幸之助氏からいただいたとき、うれしくて帰りのエレベーターの中で、時の理事長、一橋大学長・増田四郎先生と握手したこと、「大学セミナー・ハウスを訪ねる私たちが受けるものは、偉大な思想の種」といわれた米國MITのハジ・ロス教授の顔が美しい英文とともに印象深いです。

に当り、冷静な判断とマネージメントを学ぶことができました。一方、私も一学生として参加しましたから、夜中には学生が集まって熱い議論を延々とやっております。そこではいろいろ大学批判や教師の批判も出ましたけれど、みんな社会学という学問が大好きな学生でしたから、議論は尽きませんでした。そういった学問に対する熱い情熱のようなものを学びました。これはホットな経験です。

私は今、民間の研究所で、いろいろな研究調査活動に従事しておりますが、ここでは例えば委員会のコーディネイトとか、クライアントの折衝とか、冷静な判断を必要とされる部分の業務がかなり大きいのです。もう一つは、同僚やクライアントの方々とかなり熱い議論を長時間にわたってやらなければならない部分があります。

当時、社会学合同セミナーに参加した一〇〇名の学生たちは、それぞれに何かを得て社会に出ていったことと思います。今後も、私共のように若い者を育てていていただきたいと思っております。(大学合同セミナーO.B. 昭和59年慶大卒)

私の思い出のようなメッセージになりましたが、今日までの歩みを支えて下さった方々、ここに集い、現在とこれからのハウスを盛り上げて下さる方々へ心からの感謝とお礼のこぼをのべさせていただきます。

# 第133回 大学共同 セミナー

## 開館20周年記念 || 主題 || 情報化と社会

期 日  
'85.10.25~27

▼全体講義「問題提起」  
東京大学教授 竹内 啓氏

▼特別記念シンポジウム「情報化と社会」  
(司会) 東京大学教授 竹内 啓氏

東京大学教授 木村武二氏  
慶応義塾大学教授 鈴木孝夫氏

同志社大学教授 榊原胖夫氏  
▼イヴニング・レクチャー「情報化社会の光と陰」

NHK「ザ・デイ」ディレクター  
河村雅隆氏

▼シンポジウムI「生物界における情報伝達」  
(司会) 東京大学教授 尾本恵市氏

A 社会性昆虫の世界  
東京大学助教授 松本忠夫氏

B 霊長類の行動——チンパンジーを中心に——  
東京大学助手 長谷川真理子氏

▼シンポジウムII「人間と情報」  
(司会) 聖心女子大学教授 岡宏子氏

A 生命と情報 東京大学教授 清水 博氏

B 言葉、身振り、文字  
聖心女子大学助教授 無藤 隆氏

C カミと妖怪と人の間  
筑波大学教授 宮田 登氏

▼シンポジウムIII「情報化と社会・経済」  
(司会) 東京外国語大学教授 小浪充氏

A 情報化で経済社会はどう変わるか  
情報ネットワーク社会としての展望——

一橋大学教授 今井賢一氏

B 情報化の進展と生活意識の変化  
慶応義塾大学教授 井関利明氏

C 情報化と生活  
東京大学教授 竹内 啓氏

▼運営委員 竹内啓、岡宏子、尾本恵市、小浪充の四氏

▼参加学生 43名(内女子16名)  
東京(4)、東京外国語・聖心女子・東京女子・立教(各3)、慶応義塾・中央・法政・同志社・早稲田(各2)、筑波・千葉・東京工業・学習院・上智・成蹊・津田塾・東京理科・和光・産業能率(各1)、その他(7)、以上20校。

◇ マイクロエレクトロニクスにもとづく

情報技術の急速の発展は、人間社会に大きな変化をもたらそうとしている。私達の身近なところでも電話の通信ケーブルの火災による金融機関の機能停止、突然郵送されてくるダイレクト・メール、電話による様々な売り込み等々、情報化に伴う様々の現象が起きている。今回のセミナーでは情報化についての「未来展望」を与えることよりも、むしろその展開される基盤である人間の、生理的・心理的・社会的情報との関連におけるあり方を解明することがねらいである。「情報化」をめぐる問題が共同セミナー委員会の上で竹内啓氏から提起されたとき、多くの委員から様々の意見が出された。その過程で岡宏子・尾本恵市・小浪充の三氏が議論に加わり、学際的なアプローチで情報の本質的な役割を考えていくことになった。以下は、三日間に亘って展開されたセミナーのあらましである。企画運営に当たっていた四人の委員ならびに当日ご指導いただいた諸先生に改めて感謝の意を表するとともに、紙幅の都合でその一端しか紹介できなかったことをお断わりしておきたい(全体講義は2~3頁に、特別記念シンポジウムは10~11頁に別掲)。

▼シンポジウムI 生物界における情報伝達  
情報の利用は人間に特有の現象ではない。人間以外の動物もその「種社会」維持のために情報と交換を行っている。ここでは昆虫と霊長類という独立の

進化により生じたふたつの世界で動物たちがいかにして情報を伝達し、社会を構築しているかを議論した。松本氏によれば「社会性昆虫の世界は、シロアリなどにみられるように高度に分業化の進んだ複雑な社会を構築しているが、シロアリは遺伝的にプログラムされた情報にもとづく行動しかできず個性も自発性もみられない」という。それに対して霊長類は後天的に学習された文化によって集団間、地域間、個体間には情報が見られる。チンパンジーのあいさつ行動や道具使用や食物の種類などは集団や地域によって大きなちがいがあがる。「チンパンジーも人間と同じように文化によって規定された情報交換を行っているが、人間の場合には言語を媒体として大量に複雑な情報が次世代に継承されていくのに対して、チンパンジーの場合には主にメスを介してそれが行われるので限定的な情報しか伝播されない」と長谷川氏は指摘する。

▼イヴニング・レクチャー 情報化社会の光と陰  
個人消費がのびなやむなかで、個人情報報がなんらの規制もなく収集され、売買されている。プライバシーの侵害になる個人情報の商品化には倫理的な問題があるとしても「容易に法的な網がかけられるほど単純ではないし、それによる実効性も期待できないし、そうすることに

よって現在進行中の情報化の活力を弱めることになるのではないか」という懸念がある。結局、大切なことは情報化が今



# 第133回大学共同セミナー

後、草の根民主主義を進展させるのか、それとも逆に独占をもたらすのかわからないが、コンピューター社会の利便性の中でどういう社会を選択するのかということが国民全体で考えていくことが急務ではないか、と河村氏は問題提起された。

## ▼シンポジウムⅡ 人間と情報

人間はどういうかたちで情報をキャッチするか。大脳で処理した情報をどのようにに外に伝播していくのか。人間がもっている情報の生産・加工・伝達の特徴を議論した。外から入ってくるバラバラの連続量としての情報にすでに獲得している不連続な概念としての「意味」をあてはめることによって、人間はある秩序をそこに創り出している。「人間とコンピューターのパターン認識のちがいは、後者はあらかじめ与えられている情報のかたちをかえることができるにすぎないが、人間は多くの情報からさらに上位の階層の情報を帰納することができる。もちろん人間の場合でも意味が固形化してくと新しい情報を読むことができなくなる」と清水氏は人間と情報における「意味」の問題を指摘された。

人間は自然からの情報をそのまま反映するのではなく、自分に合わせて秩序を創造している。「民話の世界がいかに非合理的な世界のようにみえようと、人間はつねにこうした超自然的なものを作り出しながら自然や人間とコミュニケーションをしている」と宮田氏という。人間の子供はこうした多岐にわたる情報の

積み重ねの中に生み出される。人類の進化は個人の成長過程で個体発生的に繰り返されている。言葉もない状態で生み出された子供は、母親との非言語的なコミュニケーションのなかからしだいに言語を獲得していく。会話はたんなる言語のやりとりではない。人間コミュニケーションにとつて大事なことは、間接性状況)を相互に共有し合うということだろう。それはコンピューターによってシミュレーションすることもできないような象徴過程を含んでいるのではないか。人間のコミュニケーションは身振りからはじまって身振りにかえる」と無藤氏は指摘した。

## ▼シンポジウムⅢ 情報化と社会・経済

今日の情報化社会の到来は、サービス経済時代の一環としてとらえられるが、現代の経済社会のなかで情報化はいかなる役割を果しているのだろうか。ただこの問題を考えるとき、情報化社会の到来を産業社会の成功の結果として捉えるのか、それともその行き詰まりの帰結として捉えるかによってアプローチにズレが生じる。

今井氏によれば、「重要な情報」をどこに求めるかによって現代企業の経営戦略は大きく変わってくるという。消費者と接する現場の末端部にあると考える企業なら末端から情報を収集するだろうが、逆の見方をする企業なら現場よりも世界市場に関する情報を重視する。現代社会ではコンピューターにのる情報が増

大しているが、企業の意志決定や新しい情報の創造はコンピューターではできない。

情報化社会のなかで企業が生き残るためにはつねに新しい情報を発見し、創造していかなければならない。「定型化しえない重要な情報が末端部にあるとする」と、その組織は上意下達のヒエラルキー型組織ではなく、各人の創意工夫を重視するネットワーク型組織になるだろう」と今井氏は指摘する。

人間はつねに新しく情報を創り出す過程で自分自身を変化させていく。新しいタイプの人間へと自己を再組織化してい

## 開館20周年記念講演会

### 情報化社会は何をもたらすか

- 期日 85年10月30日午後6時～9時
- 場所 朝日ホール(朝日新聞東京本社内)

開館20周年記念行事の一つとして、一般社会人を対象とした公開講演会が朝日新聞社の後援をえて開催された。これは第133回大学共同セミナーの延長線上にある企画であり、共同セミナー委員会が全面的に企画・運営の労をとられた。

当日は小雨降るあいにくの空模様であったが、退社後のサラリーマン約一五〇名が熱心に三時間に亘る二つの講演に聴き入った。

## ◆プログラム

- 司会 聖心女子大学教授 岡 宏子氏
- 挨拶 当ハウス理事長 中川秀恭氏

く努力をするのでなければ情報化の流れはいい結果を生まない、と井関氏は主張する。「情報化が進展している国は世界的に見ればごく少数であり、圧倒的多数は前工業化社会に生きる人々であることを考えると、脱工業化社会を前提に議論することは片手落ちではないか。人間にとつて本当に望ましい情報化を実現するためには、産業社会の推進力である「利潤追求」を超える原理が模索されなければならないだろう」と竹内氏は情報技術が人間を無視したところで一面的に進展している現状がもっている危険性を指摘された。



## ▲講演▼

### I 技術革新の現在と経済社会の二面

京都大学教授 伊東光晴氏

### II 情報化と人間生活

東京大学教授 竹内 啓氏

# 特別記念シンポジウム

発題要旨

## 情報と生物社会



東京大学教授  
木村武二

人間以外の動物における情報交換というものがどのようにして生まれて、発展してきたのか。それが人間社会における情報化とどう関わっているのか。

生物が生きていくうえで必要としている情報には大別すれば「生物的情報」と「非生物的情報」がある。後者は物理的な環境変化のことであるが、ここでは前者の環境における他の生物からもたらされる情報を問題にしたい。

「生物的情報」には他種の動物からのものと同種の個体からのものがある。他種間ではだまし合いや利己的戦略が渦巻いている。例えば、アメリカに多いオオバマダラ（モナークチョウ）は鳥に敬遠

されるチョウだが、これによく似た模様や色をもっているチョウがいる。捕食者に食べられないようにわざとまぎらわしい情報を与える。

ところが同種の間ではだまし合いをやってられない。できるだけ正確な情報つまり相手にはつきりわかるような信号を与えなければならぬ。蚕はこの典型的な例である。蚕のガはさなぎから出るとすぐに交尾をして死んでしまう。メスはオスを引き付けるためにボンビコールという化学物質を腹から出す。この物質はメスしか出さない明白な信号であり、オスの嗅覚器はこの物質にしか感じない。つまり感覚器と信号の間に一对一の明白な対応があるだけの単純明快なコミュニケーションになっている。蚕のよう

に発達させていく傾向がある。あいまいな動作でも子孫を増やすのに役立てば、その性質は遺伝して増えていく。信号とも何とも言えないようなものがしだいに明確な信号に分化していく。さらにそれが長くなったり、繰り返しが起こったり、組み合わせが起こったりする。この「行動の儀式化」によって動物のコミュニケーションは飛躍的に増大していく。

様々な信号をやりとりするということがいがいの維持であるとか、親子の絆を保つのに役立つ。高度な社会性をもっているものほどボキャブラリーは豊富である。ミツバチは餌場の方向とそこまでの距離を「尻ふりダンス」で示すことはよく知られている。動物の世界ではっきりした信号をやりとりする場合、同種の個体間ならいが敵にも知られてしまうことになるので、あまりハデにしすぎると危険だからということが進化のプレッシャーになって、その中間になっている場合が多い。サンゴ礁にいる熱帯魚がハデな色の体をしているのは、捕食者からの圧力が少ないせいだろう。

そういう点からみると、人間のコミュニケーションにはプレッシャーがないからエスカレーターする一方だ。他の動物の場合には情報チェック・システムがかなり発達している。非常に明白な信号が与えられてもそれが本当かどうかチェックするようになっていく。人間の場合、触って確かめることができる情報が多くあるなかで

他の動物に見られるようなチェック・システムをどう独自に作っていくかが課題である。

## 日本の国際的言語対応を考える 武器としてのことば



慶応義塾大学教授  
鈴木孝夫

日本はいま、経済的な意味での超大国になったことで世界に対する影響力を行使する立場にある。情報技術の急速な進歩にもかかわらず、世界と日本との間には大きな情報途絶があるのではないか。超大国と呼ばれる資格をもっていない国は米、ソ連、E.C、日本の四つしかない。日本は超大国の条件の一つである「経済力」は持っているが、「軍事力」と「言語力」に欠ける。そこで軍事力を増大させなければ……という主張も出てくるが、同じ二本足なら軍事力よりもむしろ言語力を持つべきではないか。

日本がこれから情報途絶を脱し、国際化していくためには、これまで二十年來続けている「自己改造型」でも、また「征服型」でもない「共存共栄型」の国際化を考えていかなければならない。つまり、アメリカのように「折伏精神」は根付か

ないし、また強い国をモデルにして自己を改造していくような国際化も日本にふさわしい立場とはいえない。他国に合わせる自分を変えることもないし、自国に合わせて他国を変えてしまうようなこともしないという自他自立の国際化の道を意識的に選ばなければならぬ。

現在の国際交流をみるとモノとヒトの流れだけであって、ことばに依存する情報の流れは完全に入超になっている。日本と外国との情報交流は一九六〇年をさかんに国際直流から国際交流の時代になった。しかし、交流の中心は商品が中心であつてことばについていえば依然として受信型である。自然科学の分野では海外から日本に学びにくる学生も多いが、ことばによってしか構築できない人文・社会科学系の分野は入超のままである。果して日本人の発言や思想は国際社会のなかで重みを増しているだろうか。今やわれわれは世界に向かって日本人として貢献できるものを自分のことばで語るようにしなければならぬ。

ところで、世界に三、五〇〇余りある言語のなかで、一億を超える人々が使っている言語は一〇しかないが日本語はそれの中でも六番目の大言語である。また、日本は国連の中で米国に次ぐ財政寄与をしているにもかかわらず、国連の公用語として日本語を採用せよという世論をなぜおこさないのか。

大国というのは、自国の繁栄だけでなく世界経緯も怠つてはならないし、常に

地球と人類の未来を考えていかなければならない。世界市場を席巻している日本が啞のゾウのようにいつまでも押し込まれているのはルール違反ではないか。

## サービス、情報と時間



同志社大学教授  
榊原 胖夫

人間は時間と距離の制約をうけて生きている。しかし人間はそのことに満足して生きているわけではなく、そこから逃れたいと考えている。19世紀前半にできた鉄道も時間と距離を絶滅することができたわけではない。19世紀後半になると、コミュニケーションがほぼ時間の方を絶滅した。ところが依然として距離の方は克服できない。電話において一番近い所と一番遠い所の通話料金を比べると1対40のちがいがあつた。現在のテレコミュニケーションの技術変化は、距離を克服する可能性をもっており、1対2位の料金格差になるといわれている。

情報という財はどういう特徴をもっているのか。サービスという無形財を考えると、需要者と供給者が同じ時と場所にいないと需給そのものが成立しな

い。タクシーを待っているときにタイミングよくタクシーがきたので乗る。タクシーを待っているのもタクシーがこなければ需給そのものが成立しない。情報をそれだけ取り出して分析することはむずかしい。情報は有形財と無形財の両方の性質をもっている。ふつうモノの場合だとそれを売ったりするとなくなってしまうが、情報の場合にはいくら人にあげても減らない。ある意味で情報は蓄積もできるし客観化することもできるが、大部分の情報は人間の頭の中に入っている。一人の情報の利用が他の人の情報の利用を妨げない、という意味できわめて公共財的な性格をもっている。

また情報は生産にも用いられるが、消費されてしまう情報も多い。ある人にとってはある時と場所において大変価値があると思えても、他の人にとっては全く価値がないこともある。それから情報Aと情報Bがあるときにさらに情報Cが加わることによって前のAとBの価値が上がるという性質がある。一般に情報というのは集積されればされるほど価値が高くなる可能性がある。あるいは逆にその情報をもっている人が少なければ少ないほど価値が高くなり、その情報が広がれば広がるほど価値がなくなるといふこともある。

私達の今の生活は、もはや財だけでは満足できない。物財とサービスが十分にあつても情報が比較的安価に手に入らなければ満足できない。

それでは情報化社会のなかで距離の克服が進んだらどういう影響があらわれるだろうか。国土庁ではやや楽観的な見方が強いようだ。情報化社会になると地域格差がなくなり、多くの産業はどこに立地してもコストの面であり変化がなくなり、さらに地方住民のニーズにあつたサービスやセーブル活動が行われ、労働の配分は分散的になり、ついには真の地方の時代が到来するという。

だが、情報化に伴う問題点も多い。何らかの事故は大きなインパクトをもたらすので、それに対するフェーリアを工夫する必要があつた。情報、情報の秘密保持もむずかしくなる。それから「昔ハリウッド、いまデータ・ベース」といわれているように情報の集まる所にはデータ・ベースやお金が集中する。情報発生源を見ると、東京84・5%、大阪7・8%、京都0・3%という大きな格差がある。このまま情報が集中すれば「情報死」の都市が出てくる恐れがあるだろう。東京に情報やお金が集中することになれば、これは地方の時代ではなくその反対ではないだろうか。

私達が受け取っている情報の多くはコピーだが、私達はレコードを通してではなく、たまには演奏会に行つて本物の音楽を聴きたい。コピーが増えれば増えるほど本物への渴望は高まるのではない

# 千人会

85年10月～11月

◆現在会員一、五四〇名(実会員数)  
(通算入会者一、七五八名)

◆新しく会員となられた方々

4名(第81回報告(申込順))

B 中央大学教授 原田 富士雄殿

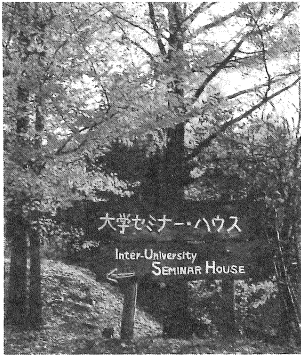
B 福井カルチャーセンター 藤井 賢二殿

B 拓殖大学専任講師 佐藤 健生殿

B 団体理事 匿名希望殿

◆会費ありがとうございます

小川智哉、長松昭男、大澤綱一郎、楡林博太郎、石村善助、小和田恒、小堀桂一郎、寺東寛治、後藤末夫、大平定雄、谷俊治、町野朔、朝倉孝吉、鈴木忠義、鈴木守、加藤一郎、鞍馬菊枝、末松安晴、大東百合子、池上秋彦、尾形憲、青柳清孝、安嶋彌、伊能敬、関本昌秀、増田茂樹、加藤五六、田端光美、飯田経夫、坂本義和、田村康男、河野恵、松田千鶴子、平野健一郎、荻原洋太郎、岡野澄、若槻泰雄、大村政男、小田切美文、横山宏、平澤茂一、黒田まゆみ、小林善彦、岡茂男、沖中重雄、久武雅夫、神戸愉樹美、関口利男、平澤興、鈴木博、塩見利夫、今井淳、大竹誠、井上勝也、朽津耕三、佐々木克己、日高精一、早弓悖、神田信夫、釜范善一、笠井伍朗、甲



朝日に輝く銀杏の木立

斐隆、宮野彬、田村恭、五十嵐香、山本満、矢吹晋、森井真、新田悟、中島文夫、久保良雄、宮田登、布川角左衛門、田村誠、城謙輔、大貫一、村井資長、鈴木謙三、吉武泰水、青木生子、吉沢英子、福田隆義、茂木誠陸、小川芳男、高橋泰蔵、堀光男、江尻美穂子、川村亮、藤田淑子、永井克孝、神山妙子、堀信一、前川真理、白濱謙一、稲垣寛、鈴木慎一、戸田盛和、藤村隣一、中井虎一、岩尾裕純、小田滋、森田二、八木江里、飯島宗享、川原高峰、森田桐郎、松岡八郎、平野敬一、矢内喜久子、高木仁、高野雄一、山口貞雄、相澤忠一、酢原善元、大坪秀二、貝塚爽平、高橋三郎、広瀬五十鈴、山田耕司、佐原六郎、松田稔子、宮田成、宮崎繁樹、近藤保、武者小路公秀、横山実、坂野親司、助盛晴、森岡清美、石川正一、磯部浩一、小川捷之、井関利明、岡山猛、白井常、鳥居泰彦、満尾寿男、木村富夫、藤井彌太郎、野見山不二、伏見弘、松原元一、井深淑子、山田良之助

◆千人会員からのたより◆  
残念なことに10月11日急逝いたしました。もうすぐ千人会からカードを預けると用意しておりましたので、年内分は故人の遺志として送らせて頂きます。  
故野田良之学習院大教授妹 野田雅子  
来春一月また恒例の八王子セミナーを催し、お世話になることを存じます。よろしく。  
順天堂大学教授 浅見一羊

◆喜寿記念祝賀会等のため身辺多忙で送金がおくれてしまいました。別便にて新著一部図書館へ寄贈いたします。  
一橋大学名誉教授 板垣興一

◆本年は一度だけの利用でしたが、来年は幾度か参上したいです。  
法政大学教授 伊藤玄三

# 寄付金 報告

85年10月～11月

◆ご芳志ありがとうございます。

◆開館20周年お祝い金

- 三〇,〇〇〇円 順天堂大学 東京家政学院大学教授
- 一〇,〇〇〇円 古水フミ殿
- 一〇,〇〇〇円 八南交通殿
- 一〇,〇〇〇円 安立電機研究部
- 一〇,〇〇〇円 小池龍太郎殿
- 一〇,〇〇〇円 東京純心女子短期大学
- 一〇,〇〇〇円 アイワテクニカルサービス殿
- 一〇,〇〇〇円 東京薬科大学学長
- 一〇,〇〇〇円 宮崎利夫殿
- 一〇,〇〇〇円 八王子中央ライオンズクラブ
- 一〇,〇〇〇円 光印刷社長
- 一〇,〇〇〇円 南部圭三殿
- 一〇,〇〇〇円 立教大学総長
- 一〇,〇〇〇円 高橋健人殿
- 一〇,〇〇〇円 八王子ロータリークラブ
- 一〇,〇〇〇円 早稲田奉仕園殿
- 一〇,〇〇〇円 三井窯業殿
- 一〇,〇〇〇円 河内工房殿
- 一〇,〇〇〇円 東京経済大学
- 一〇,〇〇〇円 大学基準協会会長
- 一〇,〇〇〇円 戸田修三郎殿
- 一〇,〇〇〇円 大久保工業殿
- 一〇,〇〇〇円 中央大学
- 一〇,〇〇〇円 (有) オヤマ殿
- 一〇,〇〇〇円 八王子市長殿
- 一〇,〇〇〇円 柴田印刷殿
- 一〇,〇〇〇円 伊藤新建設殿
- 一〇,〇〇〇円 三井銀行殿
- 一〇,〇〇〇円 宇野重昭殿
- 一〇,〇〇〇円 成蹊大学教授
- 一〇,〇〇〇円 宇野重昭殿
- 一〇,〇〇〇円 東京女子大学職員
- 一〇,〇〇〇円 石田孝夫殿
- 一〇,〇〇〇円 荒川孝子殿
- 一〇,〇〇〇円 日本女子大学・同付属高校殿
- 一〇,〇〇〇円 茶道教師 田所光子殿
- 一〇,〇〇〇円 サイエンスクリーニング殿
- 一〇,〇〇〇円 坂本工務店殿

◆出版助成のために  
第4回大学院共同セミナー記録「へブライズムとヘレニズム」(新地書房刊)の購入者芳名――  
二〇,〇〇〇円 三多摩燃料殿  
一五,〇〇〇円 なかしま外商センター殿  
一〇,〇〇〇円 不二電業社殿  
注 その他の寄付金については次号で報告させていただきます。  
\*

◆ご協力ありがとうございました。  
二〇,〇〇〇円 白川和雄、久留部茂子、田原虎次、田島恵児、鈴木一郎、磯部浩一、小谷正雄、杉山吉哉、新井益太郎、柏原啓一、原田富士雄、手塚喬介、京王帝啓、村井資長、光印刷、清水啓三郎、鹿島健次、内山孝子、山田昭房、和田義信、合田信子、白根裕里枝、山下肇 (敬称略)

二〇,〇〇〇円 多摩中央信用金庫人事部殿  
五,〇〇〇円 旧職員 西村県治殿  
二二,二〇〇円 鈴木梯二殿  
二〇,〇〇〇円



ブラインド・ウォーク——東京純心女子短大の卒業修養会のひとこま



# 業／務／通／信

'85年10・11月  
秋のキャンパスから



養護教諭中央研修会  
——5泊の集中研修に全国各地から参集

この丘を蔽う雑木林が、徐々に黄褐色に変化する——秋色の美しい時期である。その10・11月に大学関係の利用がずっと減ってしまうのは、例年のことながらまことに残念なことである。学期なかばであること、学園祭や学会の季節でもあるからである。しかし、秋は職員研修や企業人セミナーを多く迎える。個別大学の合宿(計七二グループ)と指導教授のお名前は別掲の「利用状況」でご覧いただき、ここでは両月の職員研修等「社会人」のセミナーを中心に、いくつかの話題をお届けしたい。

●ともに「20年」の  
節目を祝う

10月26日の週末、ハウスは開館20周年を祝う記念会(別掲報告)を催した。記念の共同セミナーなど九グループ計二〇名が当日の来泊者であった。この二〇年間にこの丘で合宿研修をされたグループの数は一万八、六七二、宿泊者は延べ八六万五八八人である。そのお一人お一人の「参加」あつての「20年」である。

心から感謝申し上げ、この節目を利用者の皆さまとともにお祝いしたい。

10月中旬の週末、ハウスの記念行事に先がけて利用グループの「20回」を記念するセミナーが行われている。順天堂大医学部附属順天堂医院の「病院業務改善セミナー」は文字どおり二〇年をハウスとともに歩んでこられた。今回も院長はじめ同院二〇部署の職員二〇名が一体となって参加、早朝の開講には東理事長と宮崎学長も駆けつけられた。同セミナーの発案で、以後毎回裏方の総指揮者をつとめてこられたのが事務部長の小林裕一氏。私大連盟勤務時代の同氏と飯田現名誉館長との出会いがこのセミナーの発端につながる。祝「20回」の懇親夕食

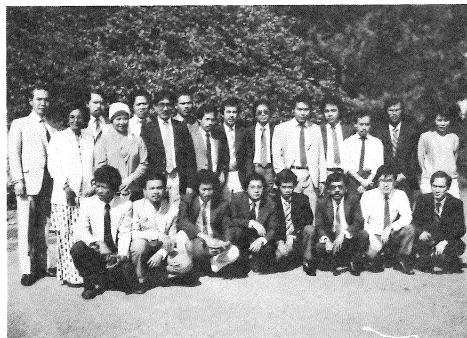
## マレーシア人企業家養成プログラム

Seminar House inspires me to write a poem:

It's a wonder to see, a delight to be,  
In a place as beautiful as this,  
Far from the bustle, the hustle, and the  
tussle,  
A place I wouldn't miss.  
Have you ever seen a sight so green,  
And nature so divinely created,  
Filled with serenity, creativity and dignity,  
A place I highly rated.  
'Plain living and high thinking',  
A motto befittingly given,  
A wise saying, very inspiring.  
Sayonara to a beautiful experience.

HAJJAH HAFSAH

Owner of Gift Shop, Flower Shop and Garden Shop



5日間の合宿を終えて(後列左から4人目がハジャさん)

パーティーに出席した名誉館長は、乾杯のメッセージで順天堂との長年の友情に感謝した。これを機会に、本号の『わたしたちの合宿』(14頁)では、小林事務部長から、毎秋のこの定例行事をご紹介いただいた。

### ●全国的な教職員研修

10月には全国各地の学校や大学の教職員が参加して二つの研修集会が行われた。ともに文部省の主催で、一つは初利用の「養護教諭中央研修会」。全国の小・中・高校の中堅の養護(保健)教諭ら計二二八名が五泊、河合雅雄・京大教授の講演「人類学から見た現代の子育て論」などの講義や実技を無事消化された(上掲写真)。他は恒例の「厚生補導事務研

修会」で、全国五六国立大学の厚生補導関係職員ら六〇名が三泊。

### ●内外の企業人セミナー

企業グループの利用は、他の時期より多く計五七。うち最大規模は、歩行ラリーを導入した東芝日野工場(一一〇名)と長年の常連である日野協力会(一一七名)で、ともに幹部の研修であった。最も長期の滞在は石川島播磨重工業の「英語合宿研修」で、中堅社員四三名が一泊された。8年春に次いで二回目の長期利用。外国人講師四名とともに終始英語のみを使っての共同生活であった(写真と感想文は15頁に別掲)。

「マレーシア人企業家養成プログラム」も昨年に次いで二度目。産業能率大がマ

## わたしたちの合宿

20回目を迎えた順天堂大学  
「病院業務改善セミナー」

順天堂大学医学部附属順天堂医院  
事務部長 小林 裕一

レーシア政府の要請を受けて企画したもので、同国の企業各界の中堅指導者二名が、近代経営のノウハウの体得のために約三ヵ月間の滞日研修。その中の五日間にわたる「都心を離れた自然の中での合宿」は、殊のほか好評であったようである（写真と感想文は13頁）。

この丘での奉仕作業を毎回研修スケジュールに組み入れているグループがある。東芝プロセスソフトウェアで、11月中にも二回の中堅技術者研修（三三名）で、早朝全員が構内の清掃に従事された。

## ●共同セミナー等を母体に

11月はじめの連休にかけて、社会学会同セミナーが開催され、三大学（慶応、法政、専修）六ゼミからの一〇九名が参加した。通算で六回目（うち最初の三回はハウス主催）。今回のテーマは「社会と人間の行方」。同月末の「現象学解釈学研究会」は第95回大学共同セミナーのBセクションを母体に発展した自主研究会で、今年で8年目。今回は東北から関西までの一八大学から三二名が参集した。

東芝「AI（人工知能）ワーキング」（一六名）で来泊された同社総合企画部の旭岡勝義課長が、退館時に同グループの記念植樹資金をとりまとめて持参された。同氏は第12回大学共同セミナー（79年）の参加学生であった。社会人となってはじめての再来で、周辺環境の変化に驚き、当時は懐しんでおられた。

今秋も10月12日・13日の二日間にわたって、私も順天堂大学医学部附属順天堂医院では、大学セミナー・ハウスにおいて「病院業務改善セミナー」を無事催すことができた。

今回は、私どもにとって第二〇回の記念すべきセミナーであった。第一回を開催した当時の昭和41年生まれの子供も成人となる年月を経たことになり、それなりの歴史と意義を持つものと思っている。これも偏えに、ハウスの館長以下皆様のご援助の賜と感謝している。

本セミナー発当初の計画は、より良い医療サービスを行うために、職員一人一人の意識の高揚とチームワーク作りを重視し、併せて患者のために業務改善の検討をしたいことになった。その場所を選択している折、懇意にしていただいている飯田宗一郎先生から、野猿峠の丘陵に大学セミナー・ハウスを開設されるというお話しを伺い、また、会員校として加盟のお誘いをいただいたので、その趣旨に賛同し、本学も会員校となり、創設まもないハウスを早速利用させていただいた。

当時の大学セミナー・ハウスは、学生や文化人、学者等の利用が主であったた

め、病院という異色の私ども社会人には、いささか遠慮しがちな面もあったが、都心の病院を離れ、緑一杯の自然と清楚な施設の中で、まさに身心ともにリフレッシュされるような環境で、夜を徹しての討議を行ったものであった。しかし、チームワーク向上のためにエンジョイする場所がなかったことは、その創立の趣旨からして仕方のないことと思いつつも、飯田先生には、折角の施設なので企業の社員研修等一般社会人も大いに利用できるように懇親の場所があれば、多少のアルコールもいだけ、コミュニケーションの向上に役立つものとの願望をお話したこともあった。

最近では、一般企業の方々ばかりでなく、他の私立医大病院でも職員の研修等に利用され、また、交友館という立派な懇親の場所もできた。セミナーの記念懇親パーティーを交友館において盛大に行うことができたことも、思い出の一つとなっている。その際、お祝いを兼ねお招きした名誉館長（当時は館長）の飯田先生も、それ以降毎回の夕食懇親会には私どもの一員の如く、ご多用のところをお加わりいただき、そして、訓話を頂戴することも定例となっている。

かつて、徹夜で討議に熱を上げた幹部の中には、すでに実年に入った者もあり、それらの者は栗の実が爆ぜる頃にハウスで二日間を過ごすことが、今では楽しみの一つとなっている。

セミナーの内容は、初期の段階では病

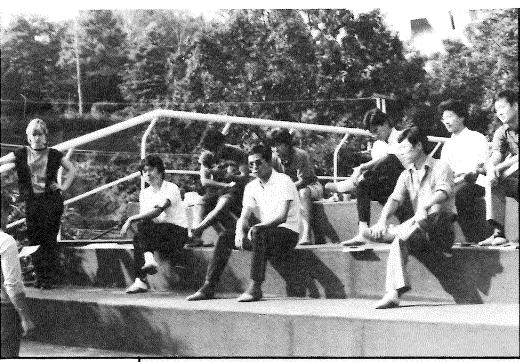
研修と懇親と——左上：グループ別報告の  
司会をする小林事務部長（右端）  
下：開催20回記念パーティー



院業務の基本事項の検討が主であったが、お蔭様で第一段階の目的を達成し、近時は細部事項の改善討議が主になり、これも病院という特殊事情から患者さん個々との接点につき絶えず改善を要することから、論に走らずに現実の見直しと反省を行っているものである。

そのため、今回の第20回記念セミナーでは「患者サービスについて」（早く病気を治したい患者さんの希望に応えるために）のテーマで、パラメディカル各部門の問題につき討議を行った。

今後、私どもはより良い医療提供を目指して、患者サービスの一層の向上を図るべく、大学セミナー・ハウスでの「病院業務改善セミナー」を継続して実施していきたいと思っている。



陽光を浴びて英語のスピーチ（大セミナー室屋上）

### 英語合宿研修—石川島播磨重工業

かなりハードな英語合宿だったので、ハウスを十分満喫することはできなかったが、もしこの合宿が、会社内（特に事務所内）の施設で行われていたら、きっと息が詰ったと思う。それだけハウスの雰囲気はその周囲の自然、職員の方々の態度のおかげで良いものだったと思う。また私はハウスの生活がそれほど plain だとは思わなかった。これは、自分の周囲の人々の魅力と交友館のおかげだと思っている。

（船舶海洋事業本部第一設計部・伊藤 護）

\*

久しぶりに英語に触れる機会を得て厳しいなかにも新鮮な毎日を送ることができました。研修の合間には、テニスやバレーボールで汗を流し、また栗や柿、あけびの実、きのこなどを間近に見つけては、深まりゆく秋の気配を実感しました。こうした新しい発見が、また毎日のスピーチやディスカッションの格好の話題になったものです。私にとって、八王子での12日間は、自然と触れ合った日々でもあったと言えます。

（海外事業本部海外人事課・加藤詠二）

\*

建物の形状、配置がユニークで、非常に良く考えられていると思った。他のクラスとのジョイント・スピーチを屋外のステージで行ったが、自然の日ざしの中でスピーチをするのは、気分が良いものである。また研修後半は大セミナー室屋上や、広場で歌ったり、ゲームをしたりディスカッションをしたり楽しい時をすごすことができた。

（第一設計部機装設計グループ・伊藤一成）

## 利用状況

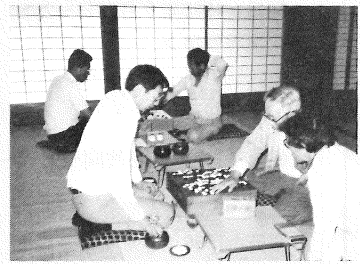
\* II 同月2回利用  
\* \* II 同月3回利用  
日帰り利用を除く

◇ 10月（85グループ、延四、一六一人）

- 東京工業大学講師
- 東京都立大学教授
- 東京都立大学数学セミナー
- 中央大学教授
- 中央大学教授
- 中央大学教授
- 東京理科大学教授\*
- 法政大学不動産鑑定研究会
- 東京工業大学教授
- お茶の水女子大学教授
- 早稲田大学教授
- 中央大学社会学研究所
- 明治学院大学教授
- 明治学院大学教授
- 東京医科大学八王子医療センター看護部
- 順天堂大学病院業務改善セミナー
- 駒沢大学教授
- 東京大学助手
- 明治大学助教
- 東京大学教授

- 東京大学教授
- 青山学院大学体育会航空部
- 東京経済大学助教
- 学習院大学助教
- 早稲田大学助教
- 早稲田大学助教
- 早稲田大学助教
- 慶応義塾大学医学部主任研修会
- 千葉大学助教
- 東京大学助教
- 東京大学法と社会を考える集い
- 学習院大学フランス会
- 学習院大学シェイクスピア劇研究会
- 早稲田大学コンチエルト
- 法政大学講師
- 産業能率大学マレーシア人企業家養成プログラム
- 東京芸術大学講師
- 東洋大学教授
- 国際経済商学学生協会
- 現代ドイツ文学研究会
- 生活時間研究会
- 第13回大学共同セミナー
- 電気学会
- 養護教諭中央研修会
- （文部省体育局学校保健課）
- 青年海外協力隊OB会
- 中小企業におけるMRPの研究

- 建築設備耐久性研究会
- 早稲田奉仕園
- ホープ会
- Forum for Corporate Communications
- 東邦亜鉛
- 日本電子計算
- 関東共立エコー
- 三井ホーム
- 酒井薬品\*
- 日本生産性本部
- ホソカワミクロン
- 千野製作所\*



### ● 遠来荘二景

（上）航空宇宙技術研究所園基クラブの12名が1泊して碁を楽しむ。

（下）井村君江・明星大教授とご主人のJ・ローラー・オックスフォード大教授が「卒論合宿」に先立ち学生とお点前。



- 久光製薬
- 織研新聞
- 航空宇宙技術研究所
- 美容室チャンピオン
- すぎもと美容室
- オリエント時計
- 東濃西部学園都市構想研究会
- 興亜火災海上保険
- 京王百貨店労働組合
- 国際交流サービス協会
- ピースメイク
- 東京重機工業
- 京王百貨店
- 日野協力会
- アイワールド
- 日本電気
- J P I C S 研究会
- 石川島播磨重工業
- 日本電気ストコンサルティング
- 日立コンピュータエンジニアリング
- （個人利用）
- 玉川大学助教
- ◇ 11月（80グループ、延三、一六八）
- 東京都立大学助教
- 東京経済大学税理士受験会
- 早稲田大学英語会
- 杉野女子大学学生会
- 東京大学法と社会を考える集い
- 青山学院大学助教
- 関田 寛雄
- 石井 昭
- 甲斐 隆

立教大学 E.S.S  
 東京都立大学助教授  
 東京都立大学助教授  
 淑徳大学社会学部長谷川、杉山、金子、森、建資  
 千徳、米川、田中、許斐、下山合同ゼミ  
 法政大学教授  
 東京都立大学生物学セミナー(1・2年)  
 東京都立大学生物学セミナー(3・4年)  
 中央大学教授  
 中央大学講師  
 明治学院大学教授  
 法政大学教授\*  
 慶応義塾大学教授  
 慶応義塾大学教授  
 青山学院大学青山キリスト教学生会  
 東京農業大学農友会ローバークル一部  
 明星大学教授  
 早稲田大学助教授  
 法政大学教授  
 法政大学教授  
 一橋大学教授

寺田 貞一  
 森 建資  
 五味 健吉  
 林 昇一  
 齊藤 叫  
 中村 達也  
 松島 浄  
 松尾 太郎  
 石川 明  
 有賀 一郎  
 井村 君江  
 片山 弘之  
 湯川 和夫  
 石 弘之

東京工業大学イアエスエ  
 東京純心女子短期大学美術科・音楽科卒業修  
 養会  
 東京神学大学全学修養会  
 国士館大学講師  
 国士館大学講師  
 日本ルーテル神学大学教職志願神学生修養会  
 高千穂商科大学学友会  
 日本女子大学附属高等学校高校生活研究セミ  
 ナー  
 厚生補導事務研修会(文部省学生課)  
 現代増本主義研究会  
 社会学合同セミナー  
 日本国際学生協会  
 第8回大学合同セミナー  
 大阪科学技術センター  
 久遠基督教会  
 建築設備耐久性研究会  
 東京八王子中央ライオンズクラブ  
 エレベータ  
 ヒマラヤ技術協力会

放電研究グループ  
 ローターアクトクラブ  
 ベスト  
 興亜火災海上保険\*  
 たなべ物産  
 ソフトウェアマネジメント  
 小林会計事務所  
 京王百貨店労働組合  
 東芝プロセスソフトウェア\*  
 日本電子計算  
 日本分光工業  
 富士電機半導体  
 日本生産性本部  
 日本データゼネラル  
 ビンヘッド  
 アイワールド\*  
 美容室チャンピオン\*  
 京王ストア  
 東芝日野工場  
 協和醸酵工業  
 中野輸送

# 予 告

## ● 第135回大学共同セミナー

主題 ナショナリズムと国際性  
 ——内村鑑三と新渡戸稲造を中心に——

期日 1986年3月13日～15日(木～土)

募集人員 約70名

### 全体講義

ナショナリズムと国際性  
 ——内村鑑三と新渡戸稲造をめぐって——

国際基督教大学大学院教授 武田清子氏

### セクション演習

- A. 内村鑑三のナショナリズム  
 明治学院大学法学部教授 渋谷 浩氏
- B. 終末論と近代日本  
 ——内村鑑三の再臨思想を中心に——  
 東洋大学文学部教授 泉 治典氏
- C. 新渡戸稲造における憂国心と国際心  
 大阪市立大学文学部教授 佐藤全弘氏
- D. 国民経済の形成をめぐって  
 明治大学政治経済学部教授 田村光三氏  
 中央大学商学部教授 山下幸夫氏

## ● 第136回大学共同セミナー

主題 文学と風土  
 ——日本文学の特殊性と国際性——

期日 1986年5月23日～25日(金～日)

### <指導教授>

大江健三郎、芳賀 徹、野中 涼、大久保喬木、田代慶一郎、仙北谷晃一、鈴木和子、川端香男里の諸氏。

## ● 第7回大学院共同セミナー

主題 人間性と犯罪(仮題)  
 期日 1986年7月4日～6日(金～日)

◆問い合わせ先=企画室 ☎0426-76-8532(直通)

## 編集後記

新春のお祝詞を申し上げます。  
 「真理の鐘」(表紙の写真)が今年も多摩の丘に高らかに鳴り響かんことを祈りながら、新しい年を迎えました。

一九八六年の第一号を開館20周年記念号としてお届けします。限られた紙幅で、昨秋行われた記念行事のすべてをお伝えすることはもとよりかなわず、断片的なご報告となりましたが、大学人の参加による「大学共同体づくり」という創立以来の伝統が、今もなお失われずに継承されていることを、行間から感得していただければと願っています。

「将来は式典にアジアの民族音楽を」と二年前、共同セミナー委員退任に当たり、徳丸吉彦お茶の水女子大教授がのべられた一言が、琴・尺八五重奏となって実現し、式典に花を添えて下さいました。記念セミナーを柱とする一連の行事は、共同セミナー委員長・岡宏子聖心女子大教授の推進力に向うところ極めて大きなものであります。

このように、我が事のように喜び、祝つて下さる多くの方々がおられることを覚えて、本号の編集も感謝のうちに無事終了となりました。

(能)

酒井薬品  
 横河北辰電機  
 小松ゼノア  
 東芝  
 松下電器産業  
 日電アネルバ  
 (個人利用)  
 日本電気  
 共和工業所  
 東洋大学教授

Mary Haruno  
 山本 正人  
 堀 光男

表紙の写真=教師館屋上の真理の鐘  
 (提供=彰国社)